様式(8)

論　文　内　容　要　旨

題目　Negative and positive self-thoughts predict subjective quality of life in people with schizophrenia

（統合失調症患者において否定的、肯定的自己認知は主観的 QOL を予測する）

著者　Tomoya Takeda、Masahito Nakataki、Masashi Ohta、Sayo Hamatani、Kanae Matsuura、Reona Yoshida、Naomi Kameoka、Takeo Tominaga、Hidehiro Umehara、Makoto Kinoshita、Shinya Watanabe、Shusuke Numata、Satsuki Sumitani、Tetsuro Ohmori

平成 31 年 Neuropsychiatric Disease and Treatment 第 15 巻 293 ページから 301 ページに発表済み

内容要旨

【背景・目的】

統合失調症の治療目標は“症状の寛解”から自らの人生をより良く歩む“リカバリー”へ変化している。リカバリー達成のために Quality of life(QOL)の改善が望まれる。QOL は就労や社会的機能を含む客観的 QOL、人生の満足度を含む主観的 QOL に分類される。近年、統合失調症患者の QOL に関連する要因として Defeatist performance belief(DPB)が注目されている(Grant ら,2010)。DPB は自己の performance に対する過度の否定的認知である。さらに、統合失調症の社会的機能の改善に肯定的自己認知が関連することも示されている(Chung ら, 2013)。一方で、否定的、肯定的自己認知が、客観的、主観的 QOL とどのような関連を持つかは明らかではない。そこで申請者らは、否定的、肯定的自己認知と客観的、主観的 QOL の関連を検討した。

【方法】

対象は 36 名の統合失調症患者と健常対照者 37 名である。客観的 QOL は Quality of Life Scale(QLS)、主観的 QOL は Schizophrenia Quality of Life Scale(SQLS)、自己に関する否定的認知や自動思考と肯定的自動思考は Defeatist performance belief scale(DPS) と Automatic thought questionnaire-revised(ATQ-R)、陽性症状、陰性症状は Positive and Negative Syndrome Scale(PANSS)、抑うつ症状は Calgary Depression Scale for Schizophrenia(CDSS)、抗精神病薬による副作用は Drug Induced

Extra-Pyramidal Symptoms Scale(DIEPSS)、神経認知機能はBrief Assessment of Cognition in Schizophrenia(BACS)を用いて測定した。2群間比較には、t-検定とマンホイットニーのU検定を実施した。統合失調症群における客観的、主観的QOLと自己認知と臨床要因との関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数そしてスピアマンの順位相関係数を算出した。そして、客観的 QOL、主観的QOLを目的変数、それぞれと有意な相関を示した要因を説明変数とした一般化線形モデルによる解析を実施した。

【結果】

1) 統合失調症群は健常対照群と比較して、DPBや否定的自動思考の得点が有意に高いことが明らかになった($p < 0.01$)。
2) 統合失調症群において、QLS の一般的所持品と活動は BACS の composite score、合計得点は副作用、SQLS の動機/意欲は肯定的自動思考、心理社会関係は否定的自動思考と抑うつ症状、症状/副作用は否定的自動思考によって有意に予測されることが示された。

【考察】

統合失調症患者が健常対照者より、DPB や否定的自動思考が高いという結果は先行研究と一致している(Campellone ら, 2016; Hill ら, 1989)。さらに、客観的QOLに神経認知機能や副作用が関連するという結果は先行研究と矛盾しない(Yamauchi ら, 2008; Ueoka ら, 2013; Gardsjord ら, 2016)。一方で、主観的QOLで測定される孤立感、副作用による睡眠リズムの乱れや気分の落ち込みに否定的自動思考、活動への意欲へ肯定的自動思考が関連しているということは初めての報告である。これらの結果から、客観的、主観的QOLの改善のためには、副作用に配慮した薬物療法とともに、神経認知リハビリテーションや自己認知への介入を目指した認知行動療法など心理社会的な治療法の組み合わせが重要であると示唆された。

様式(11)

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	甲医第　　号	氏　名	武田　知也
審査委員	主査　福井　清 副査　勢井　宏義 副査　西村　明儒		

題目　Negative and positive self-thoughts predict subjective quality of life in people with schizophrenia

（統合失調症患者において否定的、肯定的自己認知は主観的 QOL を予測する）

著者　Tomoya Takeda、Masahito Nakataki、Masashi Ohta、Sayo Hamatani、Kanae Matsuura、Reona Yoshida、Naomi Kameoka、Takeo Tominaga、Hidehiro Umehara、Makoto Kinoshita、Shinya Watanabe、Shusuke Numata、Satsuki Sumitani、Tetsuro Ohmori
平成 31 年 Neuropsychiatric Disease and Treatment 第 15 巻 293 ページから 301 ページに発表済み
（主任教授　大森哲郎）

要旨　統合失調症の治療は、患者の就労・社会機能に注目した客観的 quality of life(QOL)に限らず、生活満足度に注目した主観的 QOL も改善させることが重要である。いくつかの精神疾患の治療において、認知モデルを基盤とした認知療法の効果が実証されている。このモデルでは自己認知が感情や行動を規定するとされるが、統合失調症患者の自己認知がその QOL に与える影響は十分に解明されていない。申請者らは、自己に関する否定的・肯定的認知が客観的および主観的 QOL に影響するという仮説を立て、その関連を検討した。

統合失調症患者 36 名と健常者 37 名に対して、客観的 QOL は

Quality of Life Scale、主観的 QOL は Schizophrenia Quality of Life Scale、自己に関する否定的認知は Defeatist Performance Belief Scale、否定的・肯定的自動思考は Automatic Thought Questionnaire-Revised、陽性症状および陰性症状は Positive and Negative Syndrome Scale、抑うつ症状は Calgary Depression Scale for Schizophrenia、抗精神病薬による副作用は Drug Induced Extra-Pyramidal Symptoms Scale、神経認知機能は Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia を用いて評価した。臨床要因の 2 群間比較を行った後、相関解析を用いて患者群における両 QOL と自己認知、臨床要因との関連を検討した。さらに、両 QOL を目的変数とし、それぞれと有意な相関を示した要因を説明変数とした一般化線形モデルを用いて多因子の影響を検討した。

その結果、統合失調症患者は健常者と比較して有意に自己に関する否定的認知や否定的自動思考が高いことが示された。さらに、否定的、肯定的自動思考は、主観的 QOL とのみ関連することが明らかとなった。以上の結果は、主観的 QOL の改善には自己認知の変化が重要となる可能性を示唆している。

本研究は、統合失調症患者の主観的 QOL へ影響する要因を明確化し、統合失調症治療に新たな視点を与える所見であり、その学術的および臨床的意義は高く、学位授与に値すると判定した。